

第1セッション

19世紀英領ビルマにおけるバプテスト・カレン知識人たちの「忠誠」の表明と その政治的意図

Political Intentions of Baptist Karen Intellectuals by Performing Loyalty in the Nineteenth Century
British Burma

藤村瞳（上智大学大学院 / 日本学術振興会特別研究員）

本報告は、1887年に英領ビルマで開催されたヴィクトリア女王戴冠50周年記念式典（以下、記念式典）において、バプテスト・カレン知識人による「忠誠」の表明の背景と意図を検討するものである。英領地域各地で催された同記念式典に関し、その政治的機能が他地域の事例研究により指摘されている。ラングーンで開催された記念式典もまた、政治的場であった。上ビルマでの反政庁蜂起という不安定な情勢のなか、ビルマ人官吏やシャン藩王の厚遇や勲章授与など、政庁側は式典の場において在地政治権力者との関係性を重視した。こうしたなかで披露された住民代表から唯一の祝辞について、本報告では英語版とスゴー・カレン語版を史料として比較分析を行う。その際、諸アクターの多様な思惑や交渉が展開した場として植民地社会を動的に捉える植民地史研究の成果を踏まえ、英領ビルマの人びとの植民地支配への政治的対応を例示する。

バプテスト・カレン知識人たちは、カレン民族協会（Karen National Association: KNA）代表団として記念式典に参加した。米国バプテスト派の宣教コミュニティのなかで育った彼らの一部は、1860年代にアメリカ留学を経験した。彼らは、規律・理性・教育などが近代西洋的文明観に通底することを知ると同時に、「ネグロ」と蔑視され露骨な人種差別を経験する。白人優位な人種主義を内在させる近代西洋的価値観の矛盾に直面し、1870年には植民地主義をも批判した。

このような背景をもつバプテスト・カレン知識人は、記念式典において「良き臣民であるカレン民族」を表明した。英語版では「忠誠」・「恭順」といった従属関係を想起させる語彙が多用され、女王という植民地権力への従順や宣教教育の拡大が言及された。これに対し、スゴー・カレン語版での語彙の意味内容は明確な序列関係を示唆せず、互酬的かつ対等な関係性を意味する表現が多い。KNA代表団が植民地政庁との対等な関係性を前提したとすれば、「忠誠」の表明は、法秩序の遵守や教育などの西洋的価値を理解し、それに則った行動様式を取ることができる存在として「良き臣民カレン民族」を印象づけ、政治的地位の向上を模索したと考えられる。この近代西洋的価値観への理解と対応の在り方は、地域・植民地領域を超えた水平的拡がりのなかでの実体験に基づいたものであった。

本事例からは、政庁側が多数派のビルマ人や在地権力者へ政治的関心を寄せるなか、言語的少数派の人びとは、当該社会の一員として認知されるために自らの存在を積極的に主張する必要があった植民地社会の状況が明示される。1880年代のバプテスト・カレン知識人

の場合、その主張は「忠誠」の表明という形で展開された。「親英的」と理解されがちなバプテスト・カレンの行動の諸相とその背景を再考することで、植民地社会の政治的状況の動態への接近が可能になるという一視座を提示したい。

山茶と冷戦—東南アジア大陸部山地の人口変動をめぐって—

Wild Tea and Cold War: Highland Population Dynamics of Mainland Southeast Asia

片岡 樹 (京都大学)

本報告では、タイ国チェンライ県の山地の事例を中心に、東南アジア大陸部山地における民族構成の変化に山茶が果たした役割を考察する。東南アジア大陸部山地社会の特徴の一つは、住民の入れ替わりが激しいことである。そうした傾向は前近代から見られたが、特に20世紀後半には冷戦とのかかわりで人口移動がさらに激化している。政府統計によるかぎり、山地における主要山地民9民族の人口は、1970年代前半から2002年までの約30年間で4倍に増加している。これは国全体の数値を大きく上回っており、単なる自然増以外の理由による可能性が高い。しかも山地における人口の増加は、県や民族により著しい相違を見せる。具体的にいうと、県ではチェンライ県、民族ではモン、ラフ、アカの増加が顕著である。チェンライ県内でも特に山地人口の増加が著しいのがメースオイ郡であり、それは主にラフとアカの人口の激増によって牽引されている。本報告では、同時期に山地人口が32倍に急増したターコー区の事例をとりあげ、同区内山地集落の形成史を検討することで、冷戦期東南アジア山地社会の変動の一端を明らかにすることを試みる。

ターコー区の山地人口統計について、1970年代と2002年のものとを比べたときに明らかになるのは、この30年間存続している村落がひとつもないことと、民族構成が全面的に入れ替わっていることである。つまり冷戦期を通じ、住民の総入れ替えに近い状況が生じている。この極端な変動をもたらした二つの因子が冷戦と山茶である。

冷戦期以前のターコー区山地には、赤ラフ、リス、カレンが居住していた。それ以前にはモン・クメール語系山地民がかつて居住していたらしいと伝えられている。当時は赤ラフらが焼畑耕作を行いつつ、二次林の山茶を飲用に用いていた。また同時期には、山麓の平地タイ人の一部が二次林を所有し後発酵食用茶の生産も行っていった。

1950年代には中国国民党軍の脱走兵の一部が、この地の山茶の換金価値に着目し、茶葉の買いつけのために定住を始める。以後彼らの人口が増えるに伴い先住者のリスや赤ラフが逃散していく。1970-80年代には、茶摘み要員の不足を補うべく、漢人指導者たちは周辺山地民の入植を呼びかける。それに応じたのが、中国本土を共産党に追われ、ビルマ・シャン州におけるビルマ共産党軍の進出がもたらす治安の悪化に苦しんでいたラフやアカであった。こうしてできあがったのが、現在のターコー区山地の人口構成である。

このようにみえてくると、この地域の山地社会の動態を規定してきたのが山茶であったことに気づく。当初は焼畑二次林における、モン・クメール系山地民による後発酵食用茶生産が行われていたのが、それがのちに後発酵茶生産を行う平地タイ人や、焼畑と飲用茶の利用を行う赤ラフに引き継がれる。この過程で山茶がさらに繁茂した焼畑二次林の経済価値を中国国民党の脱走兵たちが見出し、それが隣国からの大規模な山地民の移動をもたらしているのである。

南北分断期のベトナムにおける「伝統医学」と科学への信頼 'Traditional Medicine' and Trust in Science in A Divided Vietnam

小田なら（京都大学特任研究員）

ベトナムの「伝統医学」は、中国医学や西洋医学との競合、権力・地域・時代など様々な複合的な要因によって定義や意味づけが創出されてきたもので、現在、公的医療制度内に独立した地位を与えられている。従来のベトナム国内外の研究では、このベトナム「伝統医学」創出の背景について、外敵を要因とした対外ナショナリズムの観点からのみ論じられてきた。しかし、本報告ではこうした伝統医療をめぐる公定的な語りの中に入り込んでしまうのではなく、あるいはその構築性を単に否定するのではなく、公定的な語りが生まれた経緯に目を配り、ベトナム南北分断期（1954～1975年）における「伝統医学」の形成過程を歴史的に跡付ける。すなわち、ベトナム民主共和国（北ベトナム）とベトナム共和国（南ベトナム）において、国家権力がそれぞれ正統性を担保しながら独自の「伝統医学」を医療制度内に位置づけようとした過程と、その差異や共通点を明らかにする。

北ベトナムでは1957年から、保健省をはじめとする政府が、伝統医療を担う団体や治療法の組織化に着手した。そこではさまざまな在来知・経験知を「科学化」という名の下で「東医」としてまとめ、編制していった。このような「科学」に基づいた「東医」は、仏領期に西洋医学を学んだ西医らが中心となって、行政村の社までトップダウン式に広めていこうとしたのである。

南ベトナムでは、仏領インドシナ期の伝統薬料に対する規制を改変していく方法で、「伝統医学」である「東医」を制度化する試みがあった。南ベトナムでも「科学」に裏打ちされた「東医」を目指して行くことが提唱された一方、「東医」分野における華僑の大きな人口比・影響力が、南ベトナム独自の「東医」創出には困難をきたしていた。

このように南北ベトナムは同時代に異なる文化・社会的背景を抱えていたが、両国の取り組みには共通点があった。それは、それぞれの国家が定義する「東医」は共に、「科学」を用いた「現代化」が必要と主張されていた点である。この観点は明らかに西洋医学に対抗することを念頭に置いており、そのために専門家らはかえって西洋医学の思考方式を基礎とした「科学」あるいは「現代化」を目指すことを提唱していたのである。つまり、この時期の両ベトナムでは、華僑・華人の影響力や、ベトナム独自の薬である「南薬」概念の浸透度の差異があったものの、それぞれ公的医療制度の中で西洋医学と同様に「東医」の担い手・実践内容を「科学」という概念のもとで定め、正統性を示していこうとしたのであった。その過程は国家のイデオロギーを問わず、近代「科学」へ信頼を置き、その内実が曖昧なまま「科学」が政治に規定されていく様相でもあったといえよう。

第2セッション

コタ・ムンクアンの主は何者か？

「仏教国」タイと「イスラーム国家」マレーシアの歴史認識の差、あるいは、
村落伝承情報の可能性とその限界

Who is the Lord of Kota Mengkuang?

**Historical consciousness to divide "the Buddhist "Thailand and "Muslim" Malaysia or
Possibility of Village Oral Tradition and its Limit**

黒田景子（鹿児島大学）

本発表ではマレー北部クダー(Kedah)の17世紀-19世紀における内陸の人口移動、紛争についての記憶伝承を検討する。クダーは1909年までシャム(タイ)の朝貢国であり、パタニ、トレンガヌ、クランタンなどと同様にクダースルタンが金銀樹(BungaMas)を貢納する形で「臣従」していた。これらの朝貢国はシャムのアユタヤ朝時代からナコンシータマラートやソンクラーなどとともにマレー半島中部の港市として重要な地点にある。しかし、これらに関する史料はタイ語、マレー語、西欧諸語、漢籍、日本近世の各史料を用いても、支配層の動向と交易状況の記述が主であり、内陸の状況や農民の動向についてはほぼ記述はない。そこで発表者は現地調査によって村落の口承史料を収集してきたが、2000年代後半になって村民自らが祖先の伝承に興味をもち公表する機会が増えてきた。

ここで扱うクダー州北部の農村 kg.Kota Mengkuang は18世紀後半にリゴール(ナコンシータマラート)方面から移住してきたムスリム王族(象50頭を伴う)が定住してKota(都)を築き、その後1822年~1842年のクダーへのシャムの侵略占領期(Perang Musuh Bisik)によって一族が殺害されたというものである。一族の墓や臣下の子孫は kg.Kota Mengkuang や kg.Tualang などに墓を有する。シャムの侵略占領期についてはクダー各農村にまだ口承伝承が残っているが、これらの事情について近年まで口承伝承以上の情報媒体はなかった。

コタムンクアンの王とされる Yamtuan Syarif abu Bakar Shah や臣下の墓石や子孫の言い伝えからは、彼らがりゴール方面から来たと伝わっており、村とリゴールとの関係を示すものは継承されている芸能からも伺うことができるが、タイ側の史料との検討は行われていない。そのためクダーの歴史好きの一部から Yamtuan Syarif abu Bakar Shah はアユタヤの王であり、シャムはムスリムの国であって、アユタヤ滅亡の後のラタナコーシン朝において仏教王国になったという解釈がマレー語ブログを中心に拡大している。(彼らは Kedah の史書 Marong Mahawangsa もタイの攻撃によって破壊され、英国人によって解釈された、植民地史観がまかり通っているという。)

では、タイ側史料等を用いてこの口承を検討すると、以下の可能性が指摘できる。

1) Syarif abu Bakar shah の一族はアユタヤ崩壊期に逃げてきたナコンシータマラート領主の可能性がある。

2) kg.Kota Mengkuang の隣村 kg.Bahru に伝わる Mek Merong の儀礼と踊りの内容からこの地域とナコンシータマラートとの結びつきがうかがえる。

3)現在の kg.Kota Mengkuang のマレー人は Malay-speaking Muslim であるが、その北やあるいは kg.Tualang(ナコンシータマラートマレーの子孫であり Shah の臣下)の近接地域は Thai-speaking Muslim の地域である。クダー全体にタイ語の影響があり、言語の世代推移の過程からみると Yamtuan Syarif abu Bakar Shah の一族も Thai-speaking Muslim であったのではないか。

南タイについては深南部のマレー系ムスリムのテロと闘争から東海岸のパタニ王国のマレーアイデンティティが強調されるが、南タイ全体でもムスリムの比率は高く、ムスリム農村と仏教徒農村が混在し、通婚、仏教徒への改宗が 1930 年代まで確認されている。すなわち、南タイからクダーの領域においては「緩い」ムスリムの世界があり、その差が東海岸と西海岸のアイデンティティの差となるのではないか。

また、クダーの人々が「シアム(Siam)」と言うとき、それはチャイヤから以南の半島部タイを指しており、Thai とは区別している場合がある。1909 年の Anglo=Siamese Treaty で近代国境が固定化された結果、両者の歴史認識についても国境が生じていると言わざるを得ない。

インドネシア・ムスリムの見た第一次世界大戦後の世界
—国際秩序再編の中のイスラーム—

**International Relations after World War I in the Eyes of Indonesian Muslims:
Islam in a Changing International Order**

小林寧子（南山大学）

1920年代から1930年代の植民地インドネシアでは、定期刊行物の発行が盛んになり、しかもそれまで運動体の機関誌が主流であったものから一般読者を対象とするものへと大きく性格を変えていった。従来の研究では、主に民族運動の動向が伝えられていたが、実は海外に関する情報も多かった。また、イスラーム系の運動体の関心は宗教問題であると考えられ、時事問題に向ける関心には注意が払われて来なかった。本報告では、1920年代に発行されたイスラーム系定期刊行物の中でも *Bintang Islam*（イスラームの星）、*Persatoean*（統一）／*Dewan*（議会、委員会）を中心に世界の動向はどのように伝えられていたのかを考える。

Bintang Islam は1923年からスラカルタ（中部ジャワ）で発行された。イスラーム改革派団体ムハマディヤは機関誌を発行していたが、これとは別個にムハマディヤ系の会員が発行したものである。*Persatoean* は1923年からサマリダ（東ボルネオ）で発行され、28年にスラバヤ（東ジャワ）に移動し、さらに30年にはジョクジャカルタ（スラカルタに隣接）に移動して名前を *Dewan* に変更した。*Zending Islam Indonesia*（インドネシア・イスラーム宣教）を名乗る *Maraja Sayuti Loebis* の単独編集になるもので、組織的背景はない。

両者とも、第一次大戦後の、オスマン朝の崩壊、スルタン制・カリフ制の廃止など新生トルコの動向、聖地（メッカ、メディナ）の混乱が取り上げられ、イスラーム世界の動揺の大きさがわかる。20年代後半になると、ヨーロッパ事情ならびに列強とイスラーム地域との関連を報じる記事が増える。同時に、ムスリムの開催する国際会議やヨーロッパやアメリカでのムスリムの活動も伝えられる。ムスリムの視野が広がっていくと同時に、*Imperialism* に対抗するムスリムの民族運動が各地で起きていることが認識されている。オランダ関係の記事はきわめて少なく、国際関係の中での自らの立ち位置を確かめるために世界情勢を見ているようである。

両誌とも、英語誌、蘭語誌、マレー語誌からの引用記事も多く、英領インド発祥のアフマディヤが発行する情報誌からのニュースも比較的多い。*Bintang Islam* の場合は、ムハマディヤ系の留学生や海外在住者からの情報も掲載されている。*Persatoean*／*Dewan* はそのようなネットワークはもたないものの、その情報収集力は *Bintang Islam* を凌駕する。誌面構成の革新性、女性執筆者を登用するなど、当時では時代の先端をゆく雑誌のひとつであったと思われる。また、アフマディヤ関係の情報も多く、緊密なコンタクトがあったようである。現在のインドネシアでは迫害の対象になっているアフマディヤであるが、1920年代にはアフマディヤのもたらす情報がインドネシアのムスリムの目を海外に向ける刺激のひとつとなっていたと考えられる。